筑紫女学園大学リポジト

# A Historical Analysis of Psych Verbs in English


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-02-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 松崎, 徹, MATSUZAKI, Toru<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/134 |

# 英語における心理動詞の史的一考察

松　　﨑　　　　　徹

A Historical Analysis of Psych Verbs in English

Toru MATSUZAKI

## １．序論

英語には「感情・心理状態を表す動詞」と呼ばれる一連の動詞群が存在する。本論ではそのなかでも特に使役的な（causative）意味を有する心理動詞（psych verb）に焦点を当て、動詞そのもの意味および動詞にまつわる統語上の特徴を指摘し、併せて歴史的な考察も加えながら、そうした特徴がフランス語からの影響によるところが大きいことを例証する。

心理動詞は、それ以外の動詞群とは意味および統語面において異なる特徴を見せるためか、過去においてもこの動詞群に関する研究は数多くある（Belletti and Rizzi 1988, Grimshaw 1990, Zubizarreta 1992, Pesetsky 1995）。一方、歴史的観点から心理動詞を観察した場合、その大部分がラテン語もしくはフランス語からの借用であることも興味深い事実と言える。しかしながら、これまで心理動詞群を歴史的な観点から考察した研究は筆者の知る限りにおいてはほぼ皆無に等しい。

本論の構成は以下のとおりである。第２節では英語における心理動詞の特徴を意味的および統語的面から考察を行う。第３節では個々の心理動詞を歴史的観点から調査し、その大部分がフランス語からの借用語で占められていることを例証していく。第４節では OE 期における分詞用法を考察し、この時期での分詞用法は動詞的用法と形容詞的用法との分化が未発達であり、現在の心理動詞の分詞を特徴付ける形容詞的な振る舞いの由来を OE 期に求めることが困難であることを指摘する。第５節ではフランス語における、英語の心理動詞に相当する語群の統語的な特徴を考察し、心理動詞においては単に語の借用のみならず統語的な面においてもフランス語からの影響を強く受けていることを指摘していく。

## ２．心理動詞の特徴

心理動詞とは人間心理のさまざまな動きを描写する広範囲の動詞を包含するものであり、心理の動きには、私たち人間の心に湧き上がる喜怒哀楽以外にも驚き、動揺、あるいは悲しみなども含まれるものと考える。以下、英語における主な心理動詞を列挙する。

(1) agitate, amuse, anger, annoy, appall, astonish, bore, bother, captivate, charm, concern, confound, daunt, delight, demoralize, depress, disappoint, discomfit, disconcert, discourage, disgust, dismay, displease, disturb, embarrass, enchant, encourage, enrage, entertain, excite, fascinate, flatter, frighten, frustrate, gratify, grieve, harass, horrify, humiliate, incense, inspire, insult, interest, intimidate, intrigue, irritate, madden, move, mystify, offend, perturb, petrify, please, refresh, relieve, sadden, satisfy, scare, shock, startle, stun, stupefy, surprise, terrify, threaten, thrill, tire, trouble, vex, worry

心理動詞は意味および統語面でいくつかの特徴が指摘できる。第一に、いずれの動詞も使役的な意味を有しており、Grimshaw（1990）もこれらの動詞群を frighten 類と呼び、特に使役的意味に着目して psychological causative とも特色付けている。また *Longman Advanced American Dictionary* では、例えば動詞 surprise の定義には ‘ make someone feel surprised ’ のように使役動詞の make が用いられている。本論でも心理動詞と呼ぶ場合には特に断らない限りは使役的意味を含んだ動詞を指すものとする。[1]

第二の特徴として、be＋～ing 形のように現在分詞として用いられた場合に見られる一般動詞との違いが指摘できる。例えば現在時制で用いられている一般動詞 write を be＋～ing 形に変えると通常進行形の意味になる。

(2) a. I write poems just for pleasure.
b. I am writing poems just for pleasure.

ここで着目すべきは、(2b) のような進行形の場合、そこで用いられている分詞は動詞的性格が強いことである。その根拠として、進行形においても write が現在時制の場合と同じく他動詞として poems を直接目的語として従えていることが挙げられる。

一方、心理動詞は be＋現在分詞の形では２通りの解釈が可能となる。一つは上述の write と同様進行形の意味で用いられる場合である。これは言い換えれば心理動詞が依然として動詞としての性格を保持していることを示しており、以下の例にように、心理動詞 depress は進行形でも us を直接目的語として従えている。

(3) a. The current economic downturn really depresses us.
b. The current economic downturn is really depressing us.

もう一つの解釈は、現在分詞を形容詞的用法とみなすことであり、この解釈を裏付けは、目的語の表出の仕方の違いに求めることができる。

[1] この特徴により fear や like など、同様に人間の喜怒哀楽を意味はするものの使役的意味を有しない動詞は本論の考察の対象外とする。

(4) The current economic downturn is really depressing.

上の例文の depressing は、(3b) で表出していた直接目的語 us を従えなくても文法的に容認されており、それはとりもなおさず形容詞的性格を強く帯びていることを示している(cf. Carter and McCarthy 2006：80-1)。さらに、(4)の depressing の形容詞的性格がより際立つ例として、us がもはや depressing の直接目的語ではなく、むしろ前置詞 to の目的語となっている次のような用法が指摘できる。

(5) The current economic downturn is really depressing to us.

これは通常の形容詞が前置詞を伴って目的語を取る以下のような例と同じ現象である。

(6) Balanced nourishment is important to small children.

一方、一般動詞 write の be＋～ing 形とそれに続く目的語との間に前置詞をそのまま挿入すると非文となってしまう。

(7) *I am writing to/for/with/etc. poems just for pleasure.

さらに、be 動詞を伴った叙述用法で、通常形容詞が典型的に用いられるその他の構文でも心理動詞の分詞形容詞が容認されるのは注目してよいであろう。

(8) a. It is *interesting* to know that the athlete was born in a very poor family.
(cf. It is *nice* to know that the athlete won the gold medal.)
b. We are *pleased* to announce that Tony and Meg are officially engaged.
(cf. We are *happy* to have you on our team.)

その他にも、心理動詞の分詞形容詞が形容詞的性格を強く示すことは様々な角度から例証されている。例えば、形容詞は通常 very や quite などの副詞を修飾語として伴うが、心理動詞の分詞形容詞もこれらの副詞と共起できる。

(9) a. The man showed a very confused expression.
b. The issue of education reform seems quite interesting.

一方、心理動詞以外の動詞の分詞では非文となってしまう。

⑽ a. *He studied a very spoken English every day.

b. *The baby is quite sleeping.

また、心理動詞の分詞形容詞は通常の形容詞のように比較級として用いることも可能である。ただし、この場合、～ing 形と～ed 形という派生語尾の形態的特徴ゆえ、比較変化は more や less と共起する迂言形に限られる。

⑾ a. His mere presence was more encouraging than those nice words.

b. I am less gratified with this result than the last one.

さらに、分詞形容詞としてそのまま seem の補語となることもできる。一方、一般動詞の分詞形は to 不定詞形のみでの補語用法となる。

⑿ a. He seemed frightened.

b. The movie seemed amusing

⒀ a. *The language seems spoken all over the country.

(cf. The language seems to be spoken all over the country.)

b. *He seems sleeping soundly.

(cf. He seems to be sleeping soundly.)

本節では、心理動詞が、もろもろの感情を引き起こすという使役的意味でまず特徴付けられ、また統語面では、現在分詞および過去分詞いずれの場合においても、分詞形容詞として通常の形容詞と非常に似通った振る舞いをすることを様々な角度から例証してきた。次節では、借用の観点から心理動詞群の歴史的背景を探っていくことにする。

## ３．心理動詞の歴史

英語語彙においてラテン語およびフランス語から借用語が多いことは周知の事実であるが、心理動詞群ではとりわけその比率が高いことは注目される。上述したように、Grismshaw による分類の際に心理動詞の範疇名として使用される frighten に限って言えば、OE 由来の形態素を組み合わせた（OE fryhto ‘fright’ + en）による派生語であるが、前節の⑴で挙げた動詞群は、その大部分がラテン・フランス系の借用語で構成されている。年代別で見た場合、早いものでは13世紀初頭から借用が始まり、この世紀だけでも grieve，trouble，annoy などが借用されている。その後14－18世紀の長期間にわたりほぼ途切れなく借用語が流入してきている。そうした事実を踏まえた上で以下 OED（*Oxford English Dictionary*）の語源記述に基づき、前出の心理動詞の由来を記述してみる（括

弧内の西暦はそれぞれ文献初出の年代を示す)。

A．フランス語からの借用

（古フランス語（OF）およびアングロノルマン語（AF）からの借用も含む）

amuse (1480 < OF (& F) *amuser*)

annoy (1250 < OF *anuier*; cf. F *ennuyer*)

appall (1315 < OF *apalir*)

astonish (1530 < F **estonnir*; cf. F *étonner*)

charm (1380 < F *charmer*)

concern (1450 < F *concerner*)

confound (1374 < OF (& F) *confondre*)

daunt (1300 < OF *danter*)

delight (1300 < OF *deliter*)

demoralize (1793 < F *demoralizer*)

depress (1325 < OF *depresser*)

disappoint (1494 < F *desappointer*)

discomfit (1225 < OF *desconfit*; cf. F *deconfire*)

disconcert (1687 < F *deconcerter*)

discourage (1481 < OF *descoragier*; cf. F *décourager*)

disgust (1659 < F *dégoûter*)

dismay (1297 < OF or AF **desmaier, demaier*)

displease (13.. < F *desplais-*, pres. stem of *desplaire*)

disturb (1305 < OF *destorbe*)

embarrass (1672 < F *embarrasser*)

enchant (1377 < F *enchanter*)

encourage (1490 < F *encourager*)

enrage (1589 < OF (& F) *enrager*)

entertain (1481 < F *entretenir*)

excite (1340 < F *exciter*)

flatter (1225 < F *flatter*)

gratify (1568 < F *gratifier*)

grieve (1225 < F *grever*)

harass (1626 < F *harasser*)

incense (1435 < OF *incenser*)

inspire (1340 < OF (& F) *inspirer*)

interest (1608 < F *intéresser*)

intrigue (1612 < F *intriguer*)

move (1250 < OF (& F) *mouvoir*)

mystify (1814 < F *mystifier*)

offend (13.. < OF *offendre*; cf. F *offenser*)

perturb (1374 < OF *partourber*; cf. F *perturber*)

petrify (1594 < F *petrifier*)

please (1325 < OF *plaiser*; cf. F *plaire*)

refresh (1374 < OF *refrescher*)

relieve (13.. < OF (& F) *relever*)

satisfy (1489 < OF *satisfier*; cf. F *satisfaire*)

shock (1567 < F *choquer*)

stun (1300 < OF *estoner*; cf. F *étonner*)

stupefy (1596 < F *stupefier*)

surprise (1485 < AF/OF *surprisee*; cf. F *surprendre*)

trouble (1225 < OF *trubler*; cf. F *troubler*)

vex (1426 < OF (& F) *vexer*)

B．ラテン語からの借用

agitate (1586 < L *agitat-* ppl. stem of *agitare*)

captivate (1526 < late L *captivat-* ppl. stem of *captivare*)

fascinate (1598 < L *fascinate-* ppl. stem of *fascinare*)

frustrate (1663 < L *frustrate-* ppl. stem of *frustrari*)

horrify (1791 < L *horrificare*)

humiliate (1796 < *humilitat-* ppl. stem of late L *humiliare*)

insult (1620 < L *insultare*)

intimidate (1646 < med. L *intimidate* < ppl. stem of *intimidare*)

irritate (1531 < L *irritat-* ppl. stem of *irriare*)

terrify (1578 < L *terrificare*)

C．OE 本来語

startle ( < OE *steartlian*)

tire ( < OE *tiorian*)

worry ( < OE *wyrgan*)

D　その他

anger (1377 < ON *angra*)

bore (1768 unknown etymology)

bother (1718 unknown etymology)

frighten (1666 < OE *fyrhto* + *-en*)

madden (1735 < OE *mad* + *en*)

sadden (1628 < OE *sad* + *en*)

scare (1200 < ON *skirra*)

threaten (1290 < OE *threat* + *en*)

thrill (1300 < OE *thyrel*)

以上の分類からも明らかなように、心理動詞の大部分は ME 期（1100年－1500年）におけるフランス語からの借用語で占められる一方[2]、OE 本来語として現在もその使用が認められる心理動詞の割合は非常に低い。さらにその数少ない OE 本来語も、元来は心理動詞として使用されてはおらず、そうした意味を獲得したのはむしろ ME 期になってからという事実にも着目すべきであろう。例えば、startle は OE 期には自動詞‘ struggle ’の意味での用例が OED には記載されているが、心理動詞としての意味‘ surprise　greatly ’の文献初出は16世紀末になってからである。また、worry も OE から ME 期にかけては‘ kill, strangle ’というように「（首を絞めるなどによって）生物の命を奪う」という心理動詞とはかなりかけ離れた意味での用例が中心であるのに対し、現代英語における代表的意味である‘ make　someone　anxious ’の用例が文献に初めて登場するのは19世紀になってからのことである。その他にも sadden や threaten など、frighten と同様に OE 形態素を組み合わせた心理動詞も現代英語に残ってはいるものの、いずれも ME 期もしくは16世紀の Early　Modern　English 期以降でしか文献使用は認められない。

OE 由来の心理動詞が一種の意味拡張（semantic　extension）という過程を経やすいことは上に考察したとおりであるが、そうした過程において、心理的な意味の獲得のほうが比較的後の時代に起こりやすい事実は、一部のフランス語借用語にも当てはまることである。すなわちフランス語借用語の心理動詞のなかには、文献初出時は心理的な意味を有しておらず、時代を経てから英語内で心理的意味を内包するにいたったものがある。上に挙げたフランス語借用語心理動詞を精査するとその事実がより浮き彫りにされる。以下、調査の結果を下に示す（心理的意味の括弧内の西暦はその意味で文献にはじめて現れた年代を示している）。

[2] ラテン語からも少なからず借用はされているが、そのほとんどが現代フランス語に形態を変えながら残っており（例えば、ラテン語の agitat-は現代フランス語では agiter に相当）、ここにもフランス語の影響の強さの一端がうかがえる。

| | 原義 | 心理的意味 |
|---|---|---|
| amuse | cause to muse | divert, please (1631) |
| appall | fade, fail, decay | bring into low spirits (1532) |
| charm | act upon with a charm or magic | fascinate (1440) |
| concern | sift, separate, distinguish | trouble (1592) |
| daunt | overcome, subdue | intimidate (1475) |
| depress | put down by force | bring into low spirits (1621) |
| discomfit | defeat completely | throw into perplexity (1375) |
| enchant | bewitch | delight (1592) |
| entertain | hold | amuse (1626) |
| excite | set in motion | move to strong emotion (1820) |
| incense | set on fire | make angry (1494) |
| inspire | blow or breathe into | influence with a feeling (1390) |
| intrigue | trick, deceive | interest (1894) |
| move | go, advance | affect with emotion (1300) |
| petrify | convert into stone | paralyze, stupefy (1771) |
| shock | collide, clash | scandalize, horrify (1694) |

もちろん原義から心理的意味を有している心理動詞も数多くあるのは事実であるが、いずれにせよ心理動詞に特徴の使役的意味が、原義に包含される他動的な意味と強く結びついていることは指摘されるべきであろう。以上、本節では借用語がその大半を占める英語の心理動詞を、OED の語源記述に基づいて借用元を中心に調べてきた。その結果、まず借用元の大部分はフランス語であることが判明した。さらに、心理動詞を特徴付けている心理的意味は、原義からの派生すなわち意味拡張によるものが少なからずあることを指摘した。このような意味拡張の傾向は、具体的なものからより抽象度が高いものへという意味変化の一般的な流れを背景に生じたものと考えてよいであろう。

## ４．OE 期の分詞用法

前節では、心理動詞を借用という観点から考察をおこない、併せて意味拡張という視点に基づく意味分析も試みた。本論で残された考察は、心理動詞の分詞用法を中心とした統語的特徴の由来についてである。本節では、OE 期における分詞用法を概観し、第２節で見た心理動詞の分詞用法に OE からの影響がどれほど及んでいるものなのかを考察していく。

現代英語同様、OE でも分詞は現在・過去両形が存在しており、それらは形容詞と同じ活用および機能を見せていた。以下の OE における用例は現在分詞（語尾は-ende）の典型的な形容詞的叙

述用法である。

⑭ forþon þū eart swȳðe gȳmende and smēagende daldra manna cwidas and dæda.
‘because thou art very diligent and inquisitive as to the sayings and doings of men of old’
（中島 1979：227）

OE における分詞の叙述用法はラテン語からの翻訳の際に顕著に見られ、しかも現在分詞として用いられる動詞も特定の動詞に限られているのは中島も指摘するところである。[3] 言い換えれば、分詞の形容詞的用法は一般の動詞では発生しにくく、be＋現在分詞は現代英語の場合と同様むしろ進行形と解釈する可能性の高さも指摘されている（中島 1979：227ff.）。たとえば、次のような場合はラテン語の進行形がそのまま OE に翻訳借用された典型といえる。

⑮ L erat docens > OE wæs lærende (=was teaching)
erat dīcens > wæs sprecende (=was speaking) （小野 1980：73）

さらに注目されるのは、前節でも指摘したように、心理動詞の構成メンバーの中では OE 由来のものがほぼ皆無であり、あえて言えば‘ wear down, fatigue ’の意味で用いられている tire が、OE 本来語でありかつ OE 期に心理動詞として用いられている数少ない例のひとつであるという事実である。しかも、tire の分詞用法に限っての使用例でいえば、例えば過去分詞としての用例の文献初出は15世紀に入ってからと時間的に長い乖離がうかがえる。[4] このように分詞の形容詞用法も未発達状態にあり、なおかつ心理動詞が OE ではほぼ皆無であったことを考えると、第２節で考察した心理動詞の分詞形容詞の統語的特徴は OE で誕生し現代英語に綿々と継承されてきたものとは主張し難いものがある。

そこで考えられるのは、先で見た心理動詞の分詞に見られる統語面での特徴は、もともとはこれらの動詞の借用元であるフランス語で見られる統語的特徴がそのまま英語に持ち込まれた結果ではないかということである。以下次節では、フランス語における動詞の分詞用法を考察し、現代英語の分詞用法との比較検討をおこなうなかで、先で見た英語の心理動詞の統語的特徴がフランス語からの影響を強く受けたものであることを例証していく。

[3] 中島によると、特に「戦う」（feohtan, winnan）と「住む」（eardigan, wunian）という動詞に be＋現在分詞の形が多い。
[4] OED によると現在分詞形は用例では16世紀の Shakespeare による使用が最古とされている。tire の場合はむしろ tiresome が現在分詞に代わるものとして通例用いられるが、この語でさえ文献の初出は16世紀になってからである。

## ５．心理動詞に対するフランス語の影響

島岡（1999：749ff）によると、フランス語の分詞は現在分詞と過去分詞の２つの形があり、両者はそれぞれ能動・受動の態による区別と不完了・完了のアスペクトによる区別を表している。これは現代英語における現在・過去両分詞の機能の区別とほぼ一致しており、フランス語の現在分詞に特有な不完了アスペクトも英語では現在分詞を含んだ進行形と対応していると考えてよい。また、第２節で英語の分詞が有する動詞的および形容詞的機能について述べたが、フランス語でも分詞は動詞的性格と形容詞的性格を持ち合わせており、動詞的機能の典型としては、一例として分詞節（proposition participle）の存在があげられる。以下の例文で明らかなように、分詞節は英語の分詞構文に相当している。

⑯ a. *N'ayant* pas d'amis, il s'ennuie beacoup.
b. *Having* no friends, he is very bored.

一方、形容詞的機能としては、名詞を修飾する付加形容詞の用法が指摘できる。これは英語でもごく普通に見られる用法である。

⑰ a. Il y a beaucoup d'étudiants *apprenant* l'anglais.
b. There are many students *learning* English.

さらに、フランス語には現在分詞と共通の語尾 -ant を持つ一連の形容詞群が存在しており、これらは特に動詞的形容詞（adjectif-verbal）と呼ばれている。現在分詞が動詞的機能と形容詞的機能を兼ね備えているのに対して、動詞的形容詞は形容詞としての性格が際立って強く、むしろ完全に形容詞化していると考えてもよい。その根拠として現在分詞が前後の名詞の性や数に関係なく無変化である一方、動詞的形容詞は関連する名詞または代名詞の性数との一致を見せるという事実がある。たとえば下の（18b）の文のように、動詞的形容詞用法 obéissant の語尾 -s が被修飾名詞 enfant の語尾 -s と一致している。

⑱ a. Ce sont des enfants obéissant à leurs parents.（現在分詞）
'They are the children obeying their parents'
b. Ce sont des enfants obéissants.（動詞的形容詞）
'They are the obedient children'

以上のような形容詞化した動詞的形容詞を鑑みて、英語の心理動詞の分詞に特有な形容詞的性格の際立ちは、フランス語の動詞的形容詞の特質を強く反映した結果だと筆者は考える。その根拠と

して動詞的形容詞の統語的特徴を指摘した目黒（2000）の以下の記述に注目したい。

１．主語の属詞である：Cette vendeuse est *accueillante*. (‘The female shop clerk is *entertaining*.’)
２．他の類義的な形容詞で置き換えられる：Il ya a des tableaux *ravissants* [admirables] dans le salon. (‘There is a *fascinating* [admirable] painting in the saloon.’)
３．前に副詞がある：Je suis très *reconnaissant* de vos soins. (‘I am very *grateful* for your care.’)

（目黒 2000：296；英訳部は筆者による）

これらの統語的特徴のうち１と３は、それぞれ併記した英訳からも明らかなように、上述した英語心理動詞の分詞形容詞の統語的特徴と一致している。また、用いられている動詞も不定形がそれぞれ accueillir ‘ entertain ’ と ravir ‘ fascinate ’ で、いずれも英語において心理動詞に分類されうるものである。ただそうした観点で言えば、３で用いられている動詞が reconnaissant（不定形は reconnatire ‘ recognize）であり、したがって心理動詞以外の動詞が動詞的形容詞としても使用されるという事実は英語には見られない特徴とは言えるかもしれない。しかしながら、フランス語では幅広い動詞で動詞的形容詞が認められている一方で、英語ではそれに相当する用法が心理動詞に限定されていること、そしてその心理動詞の大部分がフランス語からの借用語に多いという事実が、とりもなおさず英語の心理動詞の特殊性をより浮き彫りにしているとは言えるであろう。

## ６．結語

本論では心理動詞を歴史的観点、特に借用の観点からフランス語との比較検討を中心に考察をおこなってきた。使役的な意味を持つ心理動詞は OE 時代に存在しないわけではないが、その使用頻度は低く、また現代の使役的心理動詞の分詞用法に見られるような統語的特徴は未発達の状態であると言わざるをえない。一方、フランス語の動詞的形容詞に見られる統語的特徴は英語の使役的心理動詞の分詞用法と類似する点が多く、現代英語における使役的心理動詞の大半がフランス語から借用語であることを考慮すると、語の借用に伴って統語的特徴もフランス語から取り入れられたと考えるのは十分的を射ているであろう。

### 参考文献


Belletti, A. and Luigi R. 1988. “Psych-Verbs and Theta-theory,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 291-352.

Celce-Murcia, M. & Larsen-Freeman, D.1999. *The Grammar Book*. Heinle & Heinle.

Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Grimshaw, J. 1990. *Argument Structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.

目黒士門（2000）『現代フランス広文典』白水社

中島文雄（1979）『英語発達史　改訂版』岩波全書
小野捷（1980）『英語史概説』成美堂
Pesetsky, D. 1995. *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge, Mass: MIT Press.
島岡茂（1999）『フランス語統辞論』大学書林
Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
Tenny, C. 1998. “Psych Verbs and Verbal Passives in Pittsburghese,” *Linguistics* 36: 591-597.
綿貫陽（2000）『ロイヤル英文法改定新版』旺文社
Zubizarreta, M.L. 1992. “The Lexical Encoding of Scope Relations among Arguments.” in E. Wehrli and T. Stowell, eds., *Syntax and the Lexicon*. Syntax and Semantics 24, 211-255. New York: Academic Press.

（まつざき　とおる：英語学科　准教授）